

タイトル:『タイムマシン』

著者名:湯田中 洪木

あらすじ:

高校時代の恋人・桜と再会した進。喫茶店で彼女の小説を読み、過去の思い出に浸る。しかし、彼女は実は……。

文字数:4653字

屋下がりの喫茶店。

ジャズの流れる店内は、不安定なリズムのせいで妙に落ち着いていた。窓際の席は日にあたり、心地よい温もりだった。テーブルの上にはコーヒーとクリームソーダ。僕が苦い一口を飲むと、桜は眉を顰め、苦そうだと笑った。それから緑のソーダの無数に上る気泡がちょうどそれを持ち上げて見せるような、おもてに浮かんだアイスクリームの島をわんぱくに齧りながら「あまあい」と笑窪を見せた。

—相変わらずだな。懐かしい笑顔だ。

高校時代、桜は気の許せる唯一の女友達であり、そして大切な恋人だった。別れて五年、二十三になった僕らはそれぞれの道を歩んでいたが、今日、偶然再会した。天真爛漫という言葉は、まるで彼女のためにある。だからこうして向かい合っている、まるで時間が戻ったようだった。

「はは、それにしても今日の進くん、大人っぽい」

「何言ってんだ。お前は変わらないな」

「当たり前でしょ。……それで、どうかな？」

テーブルには原稿用紙の束。可愛い丸文字が夥しく並んでいる。僕は疲れた目を擦り、それを読んでた。—彼女は小説を書けらしい。僕は小説が苦手だが、昔、文芸部員であった彼女を思い出した。あの頃は「興味ない」とけんもほろろに断って、悲しい顔をさせていた。

五十枚の原稿を読み終える頃には指に優しく反撥する原稿用紙の妙な固さがどこのつぼを押すのかやけに疲れていた。

「どうだった？」

原稿用紙を机に落として僕がはっと息をついた時に、桜は身を乗り出して目を輝かせた。その折に襟から覗けた彼女の白い胸元があんまり瑞々しいことに愕いた。一瞬とはいえその体は、まるで処女のそれではないか。彼女はまるで成長していないように当時のそのままであった。まるで高校時代の桜がタイムスリップでもしてやってきたようにすら思える。

「ねえ、どうだったの！」

賢者たらんと必死に装うこのくだらない考察は、いわば運よく女の裸が覗けた恍惚とした背徳の誤魔化しだった。そしてそんな考察がたった一言に遮られる恥ずかしさは、五年前に学校に置いてきた若さの証だった。

「そうだなあ」

僕は首を傾げると、アイスの溶けて緑と白が毒々しく混じり合ったクリームソーダを見つめた。そしてその混沌としたおもてに浮かぶ真っ赤なさくらんぼの果実。血脈のように長い真っ赤なへたはグラスの淵にしなだれているのに、果実だけは雑色の液に持ち上げられて生きている。一顆の寂しい命が僕を見守っている。

「すごく面白かったよ」

「それだけ？」

正直、素人の僕でも桜の文章が未熟だとわかった。だが、言葉を選んだ。

「でも、ちょっと文章がよくないなあ」

「うん。たとえば？」

「少し冗長的だよ。……長ったるくて、これじゃあ読者は退屈しちゃう」

「でも、どうすれば」

「主人公とヒロインの恋愛がだれているよ。ありきたりの展開なのに随分焦らすからね」

「でも、恋愛ってそういうものでしょう？」

「セリフを削ることはできないの？ ヒロインのする世間話とか、……いらないだろう」

「主人公にとっては幸福の時間でしょう？ かけがえのない二人の時間だよ」

「それはわかるけど、——だがそれ以前にこれは小説だろう。小説としてはもっと簡潔にすべきだよ」

彼女は目を伏せた。

「小説である前に人生なの。二人の、人生なの。——ねえ、気づかない？」

寂しげに言ったその声に、胸が詰まった。

——気づかないはずがない。高校生の同級生である登場人物の男女がただ恋愛するだけの月並みなこの恋愛小説は、間違いなく僕と彼女がモデルだった。脚色された結末を除いては、この平凡な掛け合いも、見るに堪えない恋愛の心理も、まったく見慣れた——僕たちさながらだった。

「懐かしいね」と言うと、桜は眉を落としてとぼけた調子で首を傾げ、なぜかしら話を逸らした。

「新しい小説を書くの。進くんのアドバイスを聞きたいな」

ジャズの調べが妖しい店内を緊張させる。

「へえ、どんな話？」

「主人公がタイムスリップしちゃう話なんだ」

「SFか。大胆だなア」

「へへ、実はずっと書きたかったんだ」

凹んだ笑窪の奥に、僕は何か神秘を見た気がした。

「でもタイムスリップなんてありきたりじゃないか。どんなところで君の特色を見せるんだい」

彼女はあざとく小首をかしげると、飲み掛けの僕の冷めたコーヒーをまじまじ見て言った。

「うん。たとえば自分自身との葛藤とか」と、これもありきたりではあるが、僕の未熟な高揚が、言わでものこを口走らせた。

「なるほど。タイムスリップして過去の自分と邂逅することで当時の葛藤というものの抽象性を具象的にする、……SFを以て形而上学を形而下学と変容させるんだね」

僕は覚えたての言葉をそれが正しいとも知らずに乱用した。それはまるで高校時代の僕に戻ったようだ。

「はは、そうかもお」と、桜は鷹揚とあしらう。彼女もまた何も変わってはいない。——思い出したように「そうね」と、言って小さな手帳を広げた。「早速メモをとらなくちゃ」

こうした掛け合いは、懐かしさよりも意図的な当時の再現にすら思えた。それこそ彼女の書いた月並みな恋愛小説の、冗長的な会話文の実写だった。

日の射したグラスのために、罫線の敷かれたメモ帳には、海岸の波打ち際のような白い影が写っている。ただグラスに残されたさくらんぼの果実のために、白い影にはさくらんぼの、官能なまどかが細長い寄生虫に犯されたような巨影も写っていた。紙のおもてに万年筆を滑らすと、しかしインクのない轍が影とともに引かれた。

「あれ。インク切れちゃった。貸してくれない？」

桜の媚びたような八の字眉が郷愁を訴えた。

「もちろん。しかし相変わらず抜けているね」と、僕は彼女を揶揄いながら、胸ポケットに忍ばせていた一本の万年筆を手渡した。

「へへ、ありがとう」

彼女のはにかむ時分に見せる、伏せた瞼に清潔に生え揃う長い睫毛、突っ張った血色の良い唇、紅いろに火照った頬。……

「ねえ。それ、覚えている？」

僕は騒がしい鼓動を慰め、彼女の手へ渡った万年筆を指して、子供が長年の夢を叶えるように期待を膨らました。

「え？ これがどうしたの」

そんな無邪気な忘却は彼女らしくある一方で、たとしえない失望を与えた。

「君が誕生日にくれただろう？ 寂しいなあ」と、僕は乾いた笑いをした。

「あげてないよ」

しかし彼女は頑是なく言い切るのだから、こちらも躍起になる。

「もらったよ」

「いつ？」

「高三の時」……

その時、緊張した屋下がりのテーブルが、ガタンと持ち上がった。あははは、と彼女は心ならず机を蹴り上げて失笑した。

「あはは。進くん、やっぱりおかしいなあ。誕生日はまだじゃない」……

目前でイタズラっぽく微笑みを零す、万年筆を屋下がりの日に当てて矯めつ眇めつ眺める彼女の姿は、高校三年生だった僕の誕生日に、その万年筆をプレゼントしてくれた彼女よりも幼く見えたが、偶然ではあるまい。

なるほど。ようやく理会した。道理で会話に違和感があった。忘却していたのは、僕の方ではないか。

幼い桜に対して、僕はすっかり大人のような余裕のある心持となった。子供を諭すように、僕は彼女に質問を投げかけた。

「なあ桜。君の小説はSFにしてもやっぱり恋愛的な要素が欲しいよ」

「へえ、詳しく聞かせて」

「主人公は男と女と、どっちがいい？」

彼女は白い指を柔らかな頬に当てて考えると、「両方！ 男女ペアでタイムスリップしちゃえば、面白そう」と、楽しそうに言った。

「おお。いいね。だったら高校生の恋人の話にしようか。あるいは高校時代恋人だった……」

「うんうん」

「なあ。桜ならタイムマシンに乗って、過去と未来どっちに行きたい？」

僕は頬の溶けるような優しい微笑みをした。彼女は真剣に悩み、やがて言った。

「未来！ 過去なんか行ったって仕方がないじゃん。過去に行くべきなのは過去に未練がある可哀想な人だけ。それよりか私は、——私たちがいつまでも幸福に暮らす姿が見たい」

彼女は恥ずかしそうにぼっと頬を染めた。

ほのぼのと生きた日の光に照らされる彼女を見つめ、僕の瞳は愁を湛えた。

「どうして泣いているの？」

喜色満面だった彼女は僕の場違いの涙に困惑しつつも、優しく駆け寄ろうと腰を浮かして手を伸ばした。

「ダメだ！」

彼女は驚いて腕を引いた。彼女に触れるわけにはいかない。彼女とは、彼女の書いた原稿用紙を介してしか触れ合うことをしてはいけない。どうしてかそんな気がした。

「君は怖くないのかい。僕たちが、僕たちが離れ離れの未来が」と、震える唇で、唸唸と訊ねる。

彼女は子供特有の無責任なあの自信、しかしどんな大人をも慰めうるあの自信を湛えて微笑んだ。

「私たちはずっと一緒だよ」……

屋下がり、夢のように惚けた景色だった。僕は涙を裾で拭った。そして言った。

「だったらその小説の主人公たちもきつと同じことをする」

彼女はとぼけたように店内のアンティークのシャンデリアを仰いだ。

「でも、未来の自分たちの幸福な姿を見るだけの小説なんて……退屈じゃない？」

「退屈なことがあるものか。他人にいくら冗長だと嗤われようと、二人にとってはかけがえのない時間——それが人生だろ？」と、僕は彼女の優しい目を見た。……

そろそろ時間だな、と思った。

「ねえ、明日課題写させてよ」

桜は高校生らしく、高校時代、常だった頼みをさりげなくした。

「そうだなあ。それは明日の僕に頼んでよ」

「あはは、何それえ」

屋下がりの喫茶店。流れるジャズは繊細で、触れてしまえばすぐにでも壊れてしまうだろう。

テーブルの上には、底が仄黒く沈んだコーヒーカップと、日ざしのためにてらてら閃く緑の名残のコップが中に赤いさくらんぼの果実をだけ残して置かれていた。

「さくらんぼ、嫌いだったっけ？」

「ううん。そうじゃないの。でもこれを食べてしまうと、……本当になんともなくだけど、終わっちゃう気がするの」

「終わっちゃう？」

「——うん」彼女は寂しくつぶやいた。……

沈黙から、もうすでに店内のジャズが一曲丸ごと終わってしまった。別のジャズが流れ始めた。

「そろそろだね」

「……そっか。ありがとう。楽しかったよ」

「僕も——ありがとう」

座席を立つと、彼女は瑞々しい旋毛を日に明かして俯いていた。コツコツと、ようやく履き慣れた革靴が軽薄なリズムを搏つ。するとジャズはとうとうおもちゃのように出鱈目になった。——会計を済ますと振り返って声を上げた。

「桜！ ——大好きだったよ！」

彼女はぱっと顔を上げてこちらを覗いた。窓ガラスいっぱいの日を背負った彼女の顔はちょうど翳って見えなかったが、懐かしい、相変わらずの天性の明るい調子で叫んだ。

「私も一、大好き！ また明日あ！」……

ちゃらんと喫茶の鈴が鳴り、ガラスの扉が仰々しく閉じた。

——五年前の誕生日。彼女は万年筆をくれた夜、交通事故で亡くなった。あの晩、僕と彼女の幸福の未来は失われた。僕はそれを忘れていた。いや、努めて忘れようとしていた。

「——ったくよ、バカ」

塩の結晶ができた瞼にまた涙が滲んだ。みっともないな。……でも嬉しかった。きっと桜は、僕の愛しい彼女は、こんな寂しい男のためにタイムマシンに乗って、会いに来てくれたのだろう。——ありがとうな。

心臓を鳴らす高揚と、脚の痺れるような恍惚、腕の鉄の塊のように重苦しい疲労、何より胸ポケットの万年筆の——。僕はつと後ろを振り向いた。

——そこには新しいビルが建ち並び、喫茶店はもうなかった。僕はようやく知った。

「そうか。タイムマシンに乗っていたのは、彼女の方ではなかったのか」